

はじめに

本書の初版本は2015年である。あれから6年の月日が流れたものの呼吸器内視鏡の有用性は変わらないどころか、より重要性が増している。特に肺がん診療はこの6年の間で飛躍的に進歩を遂げ、まさに肺がん診療の進歩が多くの固形がんの診療をリードしている。分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の進歩、そしてその治療薬の実地臨床への導入には目を見張るものがある。また、間質性肺炎の診療においても抗線維化薬が開発され実地臨床で使用可能となったことは言うまでもない。

しかしながらそのような治療薬を適切に目の前の患者に届けるためには、現時点では病理組織がまだまだ必要である。適切な診断なくしては治療を患者に届けることはできず、実地臨床において呼吸器内視鏡はますます必要な手技となっている。特に、海外で開発されわが国にも2017年に導入されたクライオバイオプシーは気管支鏡下ならびに局所麻酔下胸腔鏡下の組織採取および気道狭窄の治療などに用いられ、多くの施設で導入が始まっている。これらの新規技術をいかに施設にうまく導入していくのかということも実地臨床では重要である。

今回、初版本の際に頂いた様々なご意見を反映して新たに改訂新版として出版することとなった。特に書籍サイズを内視鏡室や透視室、手術室などに持参しやすいようにコンパクトにし、文字のサイズは小さくならないように配慮した。また、できる限り文字だけではなく図表や写真を多用することで直感的にも理解しやすいようにした。さらに実際に実地臨床で呼吸器内視鏡を用いて診療している新進気鋭の方々に執筆を依頼し、すべての執筆者に快諾いただいた。この場をお借りして感謝申し上げたい。本書が呼吸器内視鏡診療にかかわる全ての医療従事者の一助となれば幸いである。

最後に本書の企画から出版まで、ご支援いただいた医療科学社の齋藤聖之氏に編者を代表して謝意を表する。

2021年3月吉日

日本赤十字社医療センター 呼吸器内科
出雲 雄大